

「 土砂災害、新たな時代 」

栃木県 矢板市立矢板中学校 2年 川崎 桃枝

私が小学校 1 年生だった 7 年前、通っていた矢板市立西小学校の校庭で土砂崩れが起きました。起こったのは、夏休み最後の日の深夜でした。夏休み明けのワクワクした気持ちは、立ち入り禁止にされた校庭の南側斜面を見て一変しました。私たち児童と両親と地域の方たち、そして先生たちが一緒になって整備した大切な校庭でした。大勢の人が思いを込めて守っていた校庭でした。それだけに大きなショックを受け、土砂災害の怖さを強く感じました。

後で知ったことですが、西小学校の学区では他に何ヶ所も崖崩れが起きていたのです。さらに、矢板市の隣のさくら市喜連川では 400 メートルにも及ぶ大規模な崖崩れが起きていました。矢板市もさくら市も、けが人や死者が出なかったのが不幸中の幸いでした。原因は、その半年ほど前の東日本大震災による土壌のゆるみと、3 日間激しく降り続いた長雨、関東ローム層という土質の影響だったといわれています。

関東ローム層の土壌は粘土質で普段は安定しています。しかし、地震にも雨にも強いとは言えないのだそうです。確かに舗装していない場所は雨が降るとぬかるんで歩きにくくなります。そういう地域ごとの条件を考えないといけないのだなと思いました。

7 年前の土砂崩れのことを思い出して、土砂災害について改めて調べてみようと考えたのは、西日本を中心に大きな被害に襲われた平成 30 年 7 月豪雨がきっかけです。ニュースの映像で洪水の惨状を見て心が痛みました。平成時代最悪の水害の現実息をのみました。そんな中、特集番組で、倉敷市では「数十年に一度の災害の危険性」を示す「大雨特別警報」をもとに、市からは「避難指示」が出ており、ハザードマップの予想通りに水害が起きていたのを知りました。明確な情報が示され、事前に危険も知らされていました。それなのに大勢の犠牲者が出てしまったのはなぜでしょう。番組では「認識の甘さと避難行動の遅れ」が原因と結論づけられていました。今まで大丈夫だったから今回も大丈夫だろうという安易な思い込みや、水害に対する無知があったというのです。それがそのまま避難の遅れと人的被害の増加につながってしまったのです。

「防災の常識は今変化してきている」とあるテレビの番組は訴えていました。

その理由として気象の変化が挙げられています。酷暑だった今年の夏を振り返って祖父母も、両親も、「昔はこんなに暑くなかった。」と口を揃えました。地球温暖化の影響といわれますが、海水温の上昇で台風が大型化したり、ゲリラ豪雨の回数も増えてたりしています。それに伴って水害や自然災害の危険性が確実に増しています。例えば、平成 29 年度には日本全土で 64 回だった「大雨特別警報」が、平成 30 年の 8 月までで 247 回も出されているのです。また、8 月 10 日には「記録的短時間大雨情報」が出され、矢板市でも一時間に 100mm を超える大雨が降りました。氾濫はしなかったものの、普段は穏やかに家の傍を流れる宮川が一気に増水して危険を感じました。不安になったので、社会の時間に勉強したハザードマップを矢板市のホームページからダウンロードしてみました。すると驚いたことに、西小学校だけでなく、我が家も「土砂災害警戒区域」に指定されていました。怖いという思いと同時に、しっかりと備えておかなければと思いました。

平成 30 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

次に挙げられるのは、気象庁からの警報や注意報、市町村から出される避難への呼びかけ方の名称と緊急度が、昔とは変化していることです。言葉と意味を正しく理解していないと、避難のタイミングを誤ることになります。例えば、「避難勧告」は「速やかに避難」という意味なのですが、それが理解されていないことが、テレビ番組などを見ているとたくさんありました。命を守るために、避難や防災に必要な知識は必要不可欠なものです。しかし、高齢者や幼児には徹底できないのが現実です。そういうときにこそ共助の精神と、日常的な取り組みが防災の鍵になります。

そして、防災は「ケースバイケース」でその場の状況に合わせるものだということです。災害に遭ったときに最も大切なのは想像力といわれます。知識をもとに、周囲を観察し、情報を集め、正しい判断力が下せるかが、自分の命を守ることにつながるのです。ここでも個人の日常の防災意識が問われます。

自然災害大国日本で、今私たちの生活は防災と背中合わせです。私の母校である西小学校は土砂崩れの翌年、災害を乗り越えて環境緑化で日本一になりました。ハザードマップの中では今も、土砂災害警戒区域ですが、それは私にとって、防災意識を風化させないための大切な記念品だと思っています。